

## 社会福祉専門職の専門性に関する意識

### —社会福祉系大学卒業生の調査結果から—

○ 神奈川県立保健福祉大学 西村 淳 (8654)

新保幸男 (神奈川県立保健福祉大学・1599)、中村美安子 (神奈川県立保健福祉大学・4934)、吉中季子 (神奈川県立保健福祉大学・5627)、中越章乃 (東海大学・7349)、種田綾乃 (神奈川県立保健福祉大学・8321)

キーワード：社会福祉士、資格制度、専門性

#### 1. 研究目的

社会福祉専門職の資格制度（社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士）が創設されて、長いものでは30年以上が経過し、施設・病院・行政などにおける配置が進んできた。高齢者介護を中心としたニーズ増加に伴う社会福祉領域における人材不足や、地域包括ケアへの動きなどの中で社会福祉の専門性の向上が求められている現在、社会福祉専門職の業務実態を踏まえた専門性の確保策について検討することが求められている。しかし、資格保有者がどの程度専門性を活かして業務を行っているか、専門職にふさわしい仕事をしているかといったことについての実態調査はこれまで限られている（秋山智久(2007)『社会福祉専門職の研究』など）。

本研究は、専門性の確保策を検討するため、社会福祉系大学の卒業生である社会福祉専門職の専門性の実態と意識を把握することを目的としたものである。

#### 2. 研究の視点および方法

本研究は、業務や資格について、社会福祉専門職自身がどのように認識しているかという観点から意識調査を行ったものである。調査方法としては、神奈川県立保健福祉大学社会福祉学科の卒業生に対し、2018年12月～2019年1月に郵送及びメール・WEBを用いてアンケート調査を行った。472人に発送して197件を回収し、回収率は42%であった。

#### 3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理規程及び研究ガイドラインに従い、対象者には文書で、研究の目的、研究参加の自由、匿名性の保持、研究成果の公表について説明し、調査票の返送をもって同意が得られたものとした。また、本調査にあたっては、神奈川県立保健福祉大学の研究倫理委員会の承認を得ている。

#### 4. 研究結果

回答者の属性としては、保有資格は社会福祉士83%、精神保健福祉士34%、介護福祉士34%（重複あり）、自分がどの資格で仕事をしているかの自己認識は社会福祉士66%、精神保健福祉士15%、介護福祉士19%であった。従事している事業としては、事業別では行政機関等が26%、法人別では国・自治体が24%、勤続年数は平均6年であった。

仕事の専門性に関する認識については、「自分としては専門性が必要な業務であると思う」は91%、「職場で専門性が必要な業務であると認識されていると思う」は72%、「社会

一般で専門性が必要な業務であると認識されていると思う」は67%であった。専門性に自信を持っている内容としては、「知識」71%・「技術」61%・「誇り」71%・「倫理」88%であったが、「十分持っている」とするのはそれぞれ4%、3%、23%、24%であった。また、業務に関する満足度では、「業務内容」63%・「分担」37%・「賃金」40%・「労働時間」50%・「運営」37%・「研修」45%・「人間関係」70%が満足であるとした。

資格の必要性についての認識は、「自分は必要だと思う」は社会福祉士については75%・介護福祉士は79%、「職場で必要性が認められていると思う」は社会福祉士52%・介護福祉士54%、「社会で必要性が認められていると思う」は社会福祉士23%・介護福祉士72%であった。「業務は資格を活かしたものになっている」と認識しているのは、53%であり、活かしていない理由は、「経験が重要」41%・「何でも屋になっている」または「介護をしている」21%・「事務をしている」10%であった。

処遇については、採用条件となっていたのは41%、賃金等で処遇されているのは46%であった。また、資格の取得の意味の有無としては、「意味があった」とするのは77%（理由は「学んだ知識技術を活かせる」が64%）、「意味がない」とするのは8%（理由は「資格保有者として処遇されていない」が67%）であった。

大学での学びで役に立っていることとしては、「実習」71%・「出会い」61%・「ゼミ」49%であった。大学でもっと学んでおくべきだったこととしては、「社会福祉制度の知識」81%・「制度以外の社会福祉の知識」50%で、「知識」が最も高かった。

## 5. 考察

仕事の専門性と資格の必要性に関する認識では、91%が専門性が必要な業務であると認識しており、職場での認識も72%があると回答する等高い数字を示し、業務に対する満足度では業務内容や人間関係などで高い割合を示した。資格取得に意味があったとする者も77%あり、社会福祉専門職と資格制度の社会的な定着と社会福祉専門職の意義についての自身による肯定的な評価が見て取れる。

一方で資格の必要性についての社会的な認識があると感じている者が社会福祉士について23%しかないことについては、知識と技術の範囲やイメージが明確にできるかどうかの影響していると推察される。社会福祉専門職のうち特に社会福祉士について存在する専門性についての自己認識と職場・社会の認識のずれについては、近年では社会福祉専門職への期待が社会的に示される状況が生まれているものの、現段階の現場では職場や社会の認識が十分でないと感じさせる現状は大きくは変化していないということであろう。認識を高めるための方法を検討するとすれば、専門性を示しうる知識や技術を高めるといった観点のほかには何が必要であろうか。本調査では91%が専門性が必要な業務であると認識していることが把握されている。社会福祉専門職としての業務の中でどの点でそれを感じているのか、その中身についての調査によってそれが明らかにできるのかもしれない。この点は次の課題であろう。